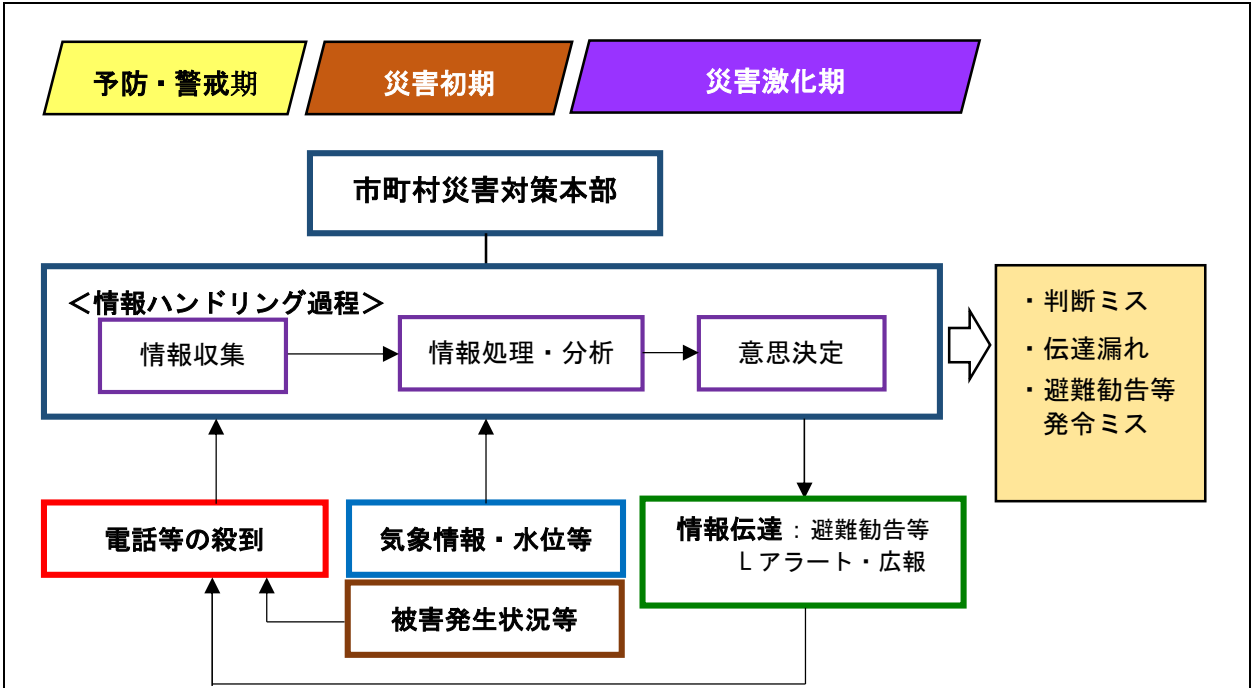


様式-3-2

成 果 報 告 書 の 概 要

助成受付番号 ※3	研 究 名	研究者・所属
第 2 8 - 3 号	豪雨災害時の市町村災害対策本部の意思決定における情報ハンドリングの成功・失敗事例の類型化及び対策に関する研究	高梨成子 株式会社防災&情報研究所
<p>(1) 本研究の目的</p> <p>近年、情報通信メディアの高度化・多様化が飛躍的に進んだことにより、情報量は爆発的に増大し、とりわけ災害時、特に豪雨災害時には、膨大な情報が交錯する。本来、被害の発生を抑止できるはずの猶予時間（リードタイム）に、地域の災害対策を担う市町村には、住民や事業所、マスメディア、防災関係機関等から短時間に過剰な情報が集中する。しかし、最近発生した災害事例においては、市町村が災害時の情報収集や伝達・広報、処理（意思決定）に失敗しているケースが多い。そこでは、避難勧告等の発令等に結びつく防災・気象関連情報等の解析・予測能力等が着目されているが、むしろ情報の高度化・多様化に対処しきれていない、緊急時の情報処理過程の脆弱さに起因するところが大きい。このため、市町村が災害から住民等の生命を守る責務を全うするには、緊急時の情報ハンドリング能力（情報の扱い方）を高めることが、喫緊の課題である。</p> <p>そこで、本研究においては、市町村における豪雨災害時の情報ハンドリングの成功/失敗事例を類型化した上で、類型毎の対策を抽出し、実験を通じて有効性を評価することにより、豪雨災害時の情報ハンドリングマニュアルを作成することを目的とする。</p> <p>(2) 本調査の実施状況</p> <p>本調査では、既存の文献や現地調査等に基づく実態調査及び分析により、市町村における豪雨災害時の情報ハンドリングの成功/失敗事例を類型化した上で、類型毎の対策を抽出した。また、防災専門研修において、災害時対応の評価を行うとともに座学を通じて対策を伝達した。さらに、社会的実験（グループワークによるシミュレーション型演習）による対応課題の抽出等により有効性を評価することにより、豪雨災害時の情報ハンドリングマニュアルを作成した。</p> <p>①実態調査による情報ハンドリングの成功/失敗事例の類型化及び背景等の分析</p> <p>日本は、その地形や地勢特性により、風水害に脆弱な国土であるが、近年、短時間強雨の発生頻度が高まるなどの気象変容により、風水害にも様々なタイプが生じている。</p> <p>河川・湖沼の堤防からの越水/溢水・決壊による外水氾濫や、大量の雨水が捌けずに発生する内水氾濫に加え、湛水型内水氾濫も発生している。また、土砂災害（崖崩れ、地すべり、土石流）や山体崩壊・深層崩壊、中山間地型洪水等も発生しており、平穏な日常生活に少なからぬ影響を与えている。</p> <p>ここでは、既存の調査報告書等の分析に加え、平成 29 年九州北部豪雨（朝倉市）、平成 28 年台風第 10 号（岩泉町）、平成 27 年関東・東北豪雨（常総市）、平成 21 年防府市豪雨災害等に関する現地調査を含む実態調査及び分析により、情報ハンドリングの成功/失敗事例の類型化及び背景等の分析を行った。</p>		



②防災専門研修における模擬実験

過去に発生した災害時の意思決定に関する「失敗」の検証はむずかしいこともあり、①で把握された情報ハンドリングに関する失敗がどのような状況や、条件の中で発生するのか、またどのような対策が効果的かについて、模擬実験(図上訓練に類似した手法)を通して分析した。

ここでは、全国各地で実施している市町村職員研修において、座学で風水害対応事例や気象情報、風水害対策等の講義を行った後、グループワークによるシミュレーション型演習を行った。

③専門度を考慮した模擬実験 (防災リーダー研修におけるシミュレーション型演習)

兵庫県が毎年実施している防災リーダー研修には、市町の防災担当職員やOB、防災ボランティアなど様々な人々が参加している。ここで実施する図上演習において、専門度の違いによる災害情報の理解度や情報処理能力等により、伝言ゲーム型情報変容や途絶、情報収集漏れなどが生じるか検証した。

(テーマ)モデル市(水沼市)における豪雨災害を想定した災害対策本部運営(グループワークによるシミュレーション型演習)

平成29年1月14日(土)午後12時40分~16時にかけて、兵庫県広域防災センターにおいて防災リーダー研修の中で、モデル市(水沼市)における災害対策本部運営を、グループワーク(15グループ)によるシミュレーション型演習を実施した。